

# 多賀城民報

題字は池田和京さんにご揮毫いただきました。

**日本共産党**  
**多賀城市議団**  
 多賀城市留ヶ谷二丁目11番3号  
 代表(364)3222  
 FAX(309)3910

## ◆弁護士による 法律相談

◆申込  
電話で予約して下さい。  
 ◆電話  
364-3222  
 ◆相談日  
1月17日(金)  
1月27日(月)  
 ◆時間  
午後1:30~  
 ◆場所  
旧阿部福商店となり塩釜県民の会事務所

## ◆議員による 暮らしの相談

電話  
 藤原益栄議員 368-6623  
 070-6497-6623  
 佐藤恵子議員 367-0182  
 090-2027-9884  
 柳原きよし議員 368-1883  
 090-2605-4984  
 戸津川はるみ議員 090-7528-2075

# 「図書館は本のレンタル屋だ」

## 藤原市議「図書館観が根本的に違うのになぜCCCなのか」

### 菊地市長「会って社長に真意を確かめる」

25日、一般質問に立った藤原益栄市議は「多賀城市教委の図書館の基本方針と、CCCの図書館観は根本的な違いがあるのに、なぜCCCに指定管理ということになるのか」と質しました。菊地市長は「社長に会って真意を確かめる」と答えました。

【藤原】第二次基本計画は「これからの図書館像」をどう考えているのか

【教育長】当然である

藤原市議はまず、菊地教育長に次のように質しました。「平成18年3月に文部科学省生涯学習政策局の諮問をうけて、これからの図書館の在り方検討協力者会議が『これからの図書館像』地域を支える情報拠点として』という報告を出している。そこをどう捉えているのか。これまで日本の図書館は本の貸し出し中心に事業を展開してきた。しかし今からの図書館は地域を支える情報拠点、すなわち地域の課題解決支援や調査研究の要望にきちんと応えていかねばならない。そのためにも資料も書籍だけではなく、新聞、雑誌、チラシなど多様に収集し、また郷土資料をネットでも調べられるようにするなど(印刷物とIT)両方を備

えた。ハイブリット図書館をめざし、司書が利用者の質問に答えるレファレンス事業に力を入れる必要がある。本市教委の『第二次図書館基本計画』も当然この報告を踏まえていると思うがいかがか」

この質問に対し菊地教育長は「当然ふまえている」と答えました。

【藤原】図書館の考え方が根本的に違っているのに、なぜCCCに委ねるのか

【教育長】……

この答弁を受け藤原市議は「つまり市教委の立場も『これからの図書館像』と同じ立場だということだ。ところが市教委が図書館を委ねようとしているCCCの増田宗昭社長は昨年7月6日の講演で次のように述べている。『すべてセルフPOSだし実際には本のレンタル屋だ。要するに図書館なんてものはない(会場笑)。名前は図書館だが、

本のレンタル屋だ』(あすか会議2013)。つまり図書館は本を貸し出してきえいれればよいというのがCCCの立場である。図書館に対する考

え方が根本的に違うのに、なぜ公募しないでCCCに図書館を委ねるということになるのか」

菊地教育長は結局答弁不能に陥りました。板橋恵一議長委の態度はまったく無責任というほかありません。

と促されると菊地市長は「増田社長に会って真意を確かめます」と答えました。



22日午後、多賀城・七ヶ浜商工会主催による「多賀城・七ヶ浜コミュニティFMシンポジウム」がホテルキャッスルプラザ多賀城で開催され、120名が参加しました。主催者を代表し、商工会会長の安住政之氏、コミュニティFM開設準備会副委員長の徳永栄臣氏の挨拶のあと、登米コミュニティエフエム代表取締役兼局長の斎藤恵一氏が講演を行いました。斎藤氏は「通常の放送をきちんとやっているからこそ災害の時もきちんと聞いていただける。『開局してから一度も休みが取れていない』と苦労も率直に話しつつ、『ラジオで聞いた、とお客さんが来てくれた』と嬉しそうに話す店の親父さんに会うと報われる気持ちになる」とFM局が地域に溶け込んでいる姿を語りました。その後シンポジウムに移り、多賀城・七ヶ浜地域でのFM放送の可能性について話し合われました。

### 東風城月

赤旗日曜版の1月12日号は、とても嬉しいものだった。最終面は紅白初出場の平成の三橋美智也こと雲石出身の福田こうへい君。29面では作家津村節子さんの『三陸の海』の紹介。津村さんは作家吉村昭さんの奥さん。私が最初に読んだ吉村さんの本は『長英逃』。伝馬町の牢を脱獄後撲殺されるまでを描いている。海軍工廠の参考にと『零式戦闘機』も読んだ。綿密な調査が吉村文学の特徴である。『三陸の海』によれば、吉村昭は『星への旅』で直木賞を受賞したが、舞台は田野畑村であった。田野畑は岩泉町の北東に位置する村で、2000年の断崖絶壁がそのまま太平洋に落ち込む北山崎が有名。吉村が東京から三泊三日もかけて初めて田野畑を訪れたのは昭和37年。以来十数年も毎夏、夫妻で同村を訪れたのだという。早野仙平村長の言うがまま、岬を買い、乳牛のオナーになり、蔵書を寄付して図書館もできた。吉村は平成2年に名譽村民になった。平成8年には鶴の美断崖に吉村の、思惟大橋にご夫人の文学碑が建てられた。震災以後、吉村の『三陸海岸大津波』の印税は全額同村に寄付されているところである。『三陸の海』を読み無性に田野畑に飛んで行きたくなった。